編集後記

『真実心』第二十八集をお届けします。平成十八年度、新入生対象の学長講話、および宗教講座の計五編が収められています。

皆さんは本学で仏教を学ばれ、宗教講座なども聴かれたわけですが、今日、何かと世間を騒がしている宗教を見直すきっかけになったでしょうか。そこで、今一度、釈尊の「仮初（かりそめ）の身に等しい苦しみは存在しない」（『ダンマパダ』203）という言葉を取り上げ、仏教とは何かを纏めておきましょう。

仮初の身とは、生まれ、やがては老死に向かういのち（肉体）を指しています。それを釈尊は生・老・病・死の四苦と捉え、それが二十九歳の彼に出家を促したと歴史は伝えています。しかし、数年の求道の末に悟りを得た彼に、突如として、朽ちることのない永遠のいのちが開示されることになるのは、「このことわりをあるがままに知ったならば、涅槃（生死の対句で、「不死の境地」を意味しています）という最上

の楽しみがある」（同上）と続いていることからも明らかです。

すると、私たちがいのちと呼んでいるものは、生じては消える波のようなものと言えるでしょうか。波が海から生じ、しばらく海に支えられ、再び海に消え去るように、私たちのいのちもまた、大海の如き永遠なるいのち（それを浄土教は無量寿仏、すなわち阿弥陀仏と呼んできたのです）に支えられているのです。さらに、生だけではなく、死もまた永遠なるいのちが存在してはじめて起こり得るのです。時宗の開祖・一遍上人が「生たるいのちも阿弥陀仏の御命、死ぬるいのちも阿弥陀仏の御命なり」（『播州法語集』）と言った意味もここにあります。

これらの事実は、生命の本質はただ生じては消える波（肉体）を見ているだけでは明らかになってこないことを示しています。私たちはその本質を知るためにも、それらの根源に繋がるものを見届けねばなりません。百数十億年をかけて進化を遂げてきた宇宙の塵（土の器）に過ぎない生命を内側へと深く辿ることによって、私たちはその根源に繋がる永遠なるいのちそのものを知ることができるのです。しかし、自らをただ波（肉体）と見なし、自分を取り巻くさまざまな波に伍して、自分にエネルギー

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

を注ぎ続ける限り、つまり、自力を恃み、自我（エゴ）を貫き通す限り、あなたは波としての生しか知らず、いつまでも生死の波に翻弄されることになる、と教えているのが仏教なのです。

最後になりましたが、ご講話をお願いしました先生方には、ご多用の中、原稿にお目通し戴きましたことを厚く御礼申し上げます。なお、本文の文責はひとえに編集委員にあることをお断りしておきます。

（編集委員会）